

市町村の枠を越えた学校間連携

～トライ アンド エラー 失敗しても大丈夫
私たちの「教育環境整備」～

上川管内公立小中学校事務職員協議会
富良野ブロック 富良野市立富良野小学校
小林 篤史

I はじめに

1 管内及びブロック概要

上川管内公立小中学校事務職員協議会（以下、上事協）は、上川管内を名寄、士別、中央、富良野の4つのブロックに分け、研修をすすめています。富良野ブロックは、富良野市周辺の1市3町1村で構成され、占冠村（3名）、南富良野町（4名）、富良野市（15名）、中富良野町（6名）、上富良野町（4名）の合計32名で研修活動をしています。

2 研究の経過

（1）この研究に至るまで

全道事務研の第62回空知大会で富良野ブロックは研究発表を行いました。具体的内容は、3つの課題別グループ（以下：グループ）による、3年次計画の1年目のとりくみでした。空知大会発表後も引き続き、グループごとに課題を設定し、研修をすすめました。最終年度の2013年度は、3年間のまとめをブロック内で協議しました。

この3年間の成果としてあげられたことは、年代や経験年数を越え、課題を共有し、共に実践を深められたことです。また、グループのとりくみがブロックへ広がり、個人や各市町村の学校間連携に活かされ、その成果や課題がさらにブロックやグループへ還流され、ブロック内のとりくみが活性化されました。これらの成果から、市町村の枠を越えた学校間連携のさらなる広がり期待し、2014年度からも、この体制を継続して研修を行うことを決めました。

（2）上事協の研究の経過

2013年6月の夏季研究大会で、上事協研修部は、今後の学校事務をすすめるための共通

目標として「教育環境整備の推進」を提起し、あわせて具体的に「ひと的整備・もの的整備・かね的整備」の3つの柱を示しました。そして2014年度は「ひと的整備」に重点を置いて研修をすすめることを提起しました。

それを受け、富良野ブロックでは、上事協研修テーマに結びつけ、【子ども達の生活の場を意識した「教育環境整備」～学校間連携を通じた学校づくり～】と研修テーマを設定し、ブロック研修をすすめていくこととしました。

（3）研修を始めるにあたって

研修テーマ設定後、グループ課題について検討しました。2014年度上事協研修部は教育環境整備をすすめるため、管内の現状を踏まえた3点の研究課題を提示しました。

- ①学校間連携の定着と発展を目指して
- ②個人や市町村を越境し、常に切磋琢磨し合う学校事務を目指して
- ③よりわかりやすい学校事務を目指して

この3点に着目し、その課題を3つのグループに当てはめました。

- ①学校間連携グループ
～学校間連携の定着と発展を目指して
- ②予算要望グループ
～提示されたとりくみから、
「予算要望」に着目して
- ③情報発信グループ
～よりわかりやすい学校事務を目指して

上事協の提起する教育環境整備や学校間連携を意識しながら、各グループが研修を行い、各グループの成果や課題はブロック全体へ還流し、ブロック会員全体のものとなるようにすすめていくこととしました。

2015年度は、2014年度の1年次でとりくんだ成果や課題を共有し、グループ体制を継続してすすめられました。

以下、各グループのとりくみを紹介します。今回、とりくみに対する各自の気持ちがより伝わるように、全員に思いを振り返ってもらいました（抽出したものを本文上段に掲載）。

II 具体的実践内容

1 学校間連携グループ

「あ～まとまらない。グループ員(先輩たち)は、自由に発言し過ぎ。どうまとめればいいのか…」これは自分がグループ長になってからの心の叫びだ。グループ研修は毎回まとまる気配は微塵もなく、自由に発言する先輩たち。毎回時間が足りない…。でも、一見まとまりないと思える話の中から、気づけば色々なアイデアが生まれている。「うちではこうしているよ」の返答から、よし、自分も学校に戻ってやってみよう!という気が不思議とわいてくる。気のせいかもしれないが、先輩たちの表情も生き活きしている。でも、やっぱりまとまらない…。

(1) 研修テーマ

学校間連携の定着と発展を目指してさらに研修を深めよう!

(2) 研修内容

学校間連携グループでは、「学校間連携の定着と発展」を柱に、ブロック内市町村の学校間連携のさらなる推進を3年次計画で考えることとしました。第62回全道事務研知大会レポートにおける「市町村の枠を越え、富良野ブロックとしてできること、広い形での連携」を継続課題とし、上川管内の研究テーマである「教育環境整備」につなげることを目標としました。

1年目は、まず各市町村の実態を把握するために、学校間連携会議の記録等の具体的な資料を持ち寄りました。グループ内の各市町村の課題を共有し、解決に向けて、市町村の枠を越えて「みんなで考えよう」という意識で手立てを交流し、自分の学校や市町村に持ち帰って活かすこととしました。交流の中から市町村の枠を越えた具体がありました。

【デジタル教科書の更新について】

～別冊資料参照

- ①富良野市学校間連携会議での協議が行き詰まっていた。
- ②グループ内で上富良野町がデジタル機器を活用した授業を理事者が参観したことを交流した。
- ③連携会議で、交流内容を話題に出した。
- ④教育委員会によるデジタル教科書を活用した授業参観が実施された。
*アピールの場として他職員も協力。
- ⑤結果として予算化につながった。
*教育委員会も実際に見たことにより、理事者へ予算化を働きかけやすかった。

このように、市町村の枠を越えたグループ交流から、問題解決への手立てを見出すことができました。

2年目は、各市町村が学校間連携をより活性化させるためには、今何をとりくめばいいのかを考えました。交流の中で情報発信や、共通予算要望は、市町村の枠を越えてとりくむことができるとの結論になりました。

【情報発信のあり方について】

～別冊資料参照

- ①上富良野町で町内教職員向けの事務だよりを毎月発行している。
- ②これは当初、他ブロックの東神楽町で毎月発行している町内教職員向け事務だよりの提供を受け、ほぼそのまま発行。
- ③次第に独自の内容になり、月号連携会議のことも発信するようになった。
- ④上富良野町の事務だよりを中富良野町へ提供し、新たに発行した。

(3) 成果と課題

2年間のグループ研修では、毎回の実践交流が、上手くいかなかったことや、どう解決すべきか悩んでいることなども含め盛り上がりました。交流の中から、課題解決につながる情報が生まれていました。このグループ研修で得た情報をただの意見交流で終わらせずに活かすためには、受け皿となる組織が必要で、その組織を活性化させることが、「教育環境整備」へとつながるという2年目のまとめになりました。そのためには、「ひと的整備」をすすめていく必要があることを確認し、グループ研修を通じて前進できたことが成果といえます。今後は、グループ研修で得た情報を広く外へ発信することが課題といえます。

2 予算要望グループ

予算要望を実施していない市町村から、予算要望はなくてもいいという声を聞くことがあるが、教育委員会が教育現場を知る貴重なチャンスをあえて逃しているという気がしてならない。予算要望書は、その学校が抱える課題が整理されたものであり、教育環境を整備する上で貴重な資料となるし、教育環境整備についての知識も深めてくれるものだ。

(1) 研修テーマ

予算要望書を通して見えてくる教育環境整備について考える

(2) 研修内容

予算要望グループではこれまでの研修の流れに沿い、3年をスパンとしたおおまかな計画を考えました。

1年目は各学校の予算要望の交流をし、2年目では要望した内容がどのように実現されているか交流しました。この成果を踏まえて、3年目は各学校の予算要望書のレベルアップを図ろうという計画です。

そして、この計画に加え、予算要望書を通して学校という教育環境をよりよく知ること、さらに予算要望の具体的内容を交流し、他校の実践を参考に自校の「教育環境整備」に活かすことができないかという目標もかかげました。

予算要望書の交流で行った新たな試みとして、ポイントを絞って学校間交流を行ったことが上げられます。具体的には、燃料費光熱費の要望の交流を行ったところ（別冊資料参照）、燃料費の節約の話から、教室、体育館の温度設定の話に発展しました。このことにより、それまで設定温度を意識したことのなかった人が今後校内を見回す際に、視点のひとつに加えられるれば、交流の成果といえます。

予算要望書を作成するにあたって、事務職員として知っておくと良い知識があると思います。例えば、グラウンドに土を入れてほしいという要望があったとき、それをそのまま教育委員会へ伝えるのではなく、事務職員の段階でそれに肉付けをして、より説得力のあるものに仕上げることです。グラウンドのどこに、ダンプ何台分が必要なのか。ただ山積みしておくだけでいいのか。重機をいれてならす必要があるのか等を加えると、よりレベルの高いものになります（別冊資料参照）。

また、教育環境の改善につながる実践交流として、自校でできる小規模営繕、具体的営繕の様子も交流しました。小規模営繕では、情報と少しの工夫と労力により、自分たちでできる営繕について交流されました。

例えば、アスファルトの窪みを補修するためには、DR ミックスという材料を使うと可能であるという報告がありました（別冊資料参照）。業者に頼むと仕上がりは良いかもしれませんが、修繕費を圧迫し、教育予算が厳しい中では、自分たちで行うという考え方も必要かもしれないと話し合いました。

営繕の様子交流では、知識として営繕の方法などを知っておいた方がいいのではないかということも話し合いました。例えば、雨漏りの修繕は原因が特定しづらく、また要望としてよく上がってくるものですが、ある学校でこういった工事を行ってもらった結果、雨漏りがなくなったという報告がありました。こういう営繕に関する知識は、教育委員会への説明や、業者と話をする際の有効な情報になります。

(3) 成果と課題

反省点としては、交流を図ることで参考になることはありましたが、系統立てて整理しないと、交流によって得た有効な情報が活かされず、次につながらない可能性があります。特に営繕の実践交流は、限られた時間の中で、十分な議論ができませんでした。

しかし、自分以外の実践を知ることにより「教育環境整備」に対する見方が広がったという意見もあり、人と人とのつながりにより、情報の共有という財産を得ることができました。2年間の成果といえます。

また、営繕の実践交流では、どの業者がどういったことができるかという情報を、整理して押さえている必要があるという意見もあり、必要なことであると確認しました。

3 情報発信グループ

近頃…どんなに丁寧に提案物をつくろうと、どんなふうに伝えたら少ない時間の中で効率的に提案できるか、わかりやすい説明になるか事前に考えようと、実際に動き出してみると理解が不十分だった(または、話が通じてなかった)ということがよくある。これはいったいどうしたことなのだろうか…と怒りで手が震えることもある(実際には震えないが、そんな感覚)。

しかし、情報発信Gで「わかりやすい学校事務」を目指し運営計画や提案物を見つめ直したり、実際に提案する時の話をきいたり、若い事務職員の話を書いたりして、「先生方の立場で考えられたか?」「少し傲慢になってはいないか?」「必要な情報を伝えられているか??」等々、「まず自分が学習しなくては。わからないことが多すぎる。」と経験年数ばかり増えた私は思った。学校は多忙化するばかりで先生方も大変だ。「謙虚に、日常の情報交換を大切に」と反省した。反省はしたが、計画→実践→達成又は怒り→反省、計画→実践→怒り又は達成→反省、そんな毎日である。

(1) 研修テーマ

よりわかりやすい学校事務を目指して、情報を発信していこう

(2) 研修内容

情報発信グループの1年目の研修は、2014年度からの富良野ブロック研究テーマ、グループの研修テーマである「よりわかりやすい学校事務」に着目して、年度の目標や重点・業務のすすめ方が明記されている学校事務運営計画を改めて見つめなおすことにしました。学校事務運営計画を持ち寄り、グループ内で交流を行いました。「よりわかりやすい」という面では、課題があるという人も多く、意見交流をしながら、次年度に向けて試案を作成しました(別冊資料参照)。

また、「ひと的整備」の観点から学校事務運営計画を見ると、その業務のほとんどが事務職員単独で行っているものではなく、多くの人とつながりを持ちながらすすめられていることに改めて気づき、単に計画を見つめなおすだけではなく、自分の仕事へのとりくみ方や、職員との関わり方も見つめなおすきっかけになったことが1年目の大きな成果でした。

2年目の研修は、昨年度見なおした学校事務運営計画を実際に提案してみようだったかということ、を、「情報を発信する」(わかりやすさ・提案のしやすさ・職員の反応・提案時に気を付けていること)という点に着眼して交流しました。「教育環境整備」は、事務職員が一人ですすめていくものではなく、全職員や児童・生徒の共通認識・協力・分担・

連携で行うもので、その全体像をしめすのが学校事務運営計画になります。計画自体のわかりやすさと同時に、具体的なイメージが持てる提案や説明が必要になります(別冊資料参照)。

同じ着眼点で運営計画に基づいて作成された「校内予算配分」「予算要望書」の職員会議での提案物についても交流を行いました。どの提案についても、それぞれが工夫して原案を作成し、職員会議において「わかりやすい学校事務」を意識しながら提案していましたが、共通する課題は、会議にかけられる時間が制限されていることです。その解決策として、日常的に担当者と打ち合わせを行うことや、事務だより等を利用して伝達や職員との意思疎通をタイミングよく行うことが必要不可欠になります。

情報発信の視点からみると、職員への提案は、単に予算配分の周知や、予算要望事項をとりまとめた結果を知らせるだけではなく、現状の課題を伝える場・次年度必要だと思われることを伝える場とも捉えることができます。それぞれが予測する「教育環境整備」に向けて準備をするためにも大切な機会だと考えます。

(3) 成果と課題

グループには様々な年代・市町村・学校規模の人が集まっています。運営計画や職員会議での提案物をもとに交流することは、具体的な実践発表にもなり、自分以外の事務職員が、どのように仕事をすすめているのか、情報発信の手法を知る貴重な機会となり、何よ

り大きな成果といえます。

また、「わかりやすい学校事務」を意識しながら情報発信することは、周囲の理解や連携・協力が深まり、「教育環境整備」の質を高め定着させていくためには、重要だと確認することができました。

一方で、説明時間の不足や、なかなか理解が深められないという課題がありますが、私たち自身の仕事を整理・発展させていくために、改めて「調査・実態把握→企画→運用・展開→反省」という学校事務のサイクルを基本にして、よりよい「教育環境整備」を目指していくことが重要です。

Ⅲ まとめ

【成果】

3グループのとりくみを通じての考察

≪「教育環境整備」≫

学校間連携グループ

・各市町村の学校間連携の活性化

予算要望グループ

・情報の共有を通じて、各個人の知識を深め、よりよい予算要望書の作成

情報発信グループ

・運営計画等の見なおしから、仕事へのとりくみ方や、職員との関わり方も見なおす
⇒それぞれのとりくみが「教育環境整備」へ
⇒各グループ、「教育環境整備」へのアプローチは異なるが、「人と人とのつながり」＝「ひと的整備」が「教育環境整備」にとって必要だということが共通しているといえます。

≪「市町村の枠を越えた学校間連携」≫

- ・メンバーそれぞれが、自校や各市町村の課題を持ち寄り、グループ内で共有。
- ・他市町村の課題でも自分の課題と捉える。
- ・課題を持ち寄り、共有する→解決に向けてみんなで考え、動く＝学校間連携の根幹
- ・交流される実践は、各市町村の学校間連携を基礎として派生したもの。
- ・すなわち、ブロックにおけるグループのとりくみ自体が、「市町村を越えた学校間連携」になっているといえます。

≪ 富良野ブロック2年間の成果は… ≫

- ①各自が課題を持ち寄る。
- ②各自が3グループでの交流で、自校や各市町村の課題を客観的に見つめる。
- ③新たな実践につながるきっかけを得る。
- ④各自が、各学校・各市町村に持ち帰って実践する ⇒「教育環境整備」へ
- ⑤実践から生まれた成果・課題をブロックに還流する。

*①～⑤が循環することで、
「市町村を越えた学校間連携」へ

2年間のブロック研修で、このサイクルが機能し始めていることが成果です。

富良野ブロックは、3グループに必ず各市町村から1名が所属し、各市町村の学校間連携が機能しているという基礎があり、このサイクルを上手く機能させることができる環境にあります。

また、上手くいかなかった実践も気兼ねなく交流する雰囲気があり、そこから新たな実践が生まれるきっかけとなっています。

【課題】

2年間のとりくみで、ブロックや各グループの活動が活発になりました。しかし、各グループ間の連携は、ブロック全体での研修時間が限られていることもあり、まだまだ活発とはいえないことが課題です。2012年から運用が開始されたSNS「上事協Web」も活用しながら、各グループ間の連携を強め、ブロック全体をさらに活性化させ、各学校の実践へつなげていくことが必要です。

【今後に向けて】

今後は、ブロックの交流で得たことを、各自が、自分の学校・市町村に持ち帰って確実に実践し、仕事につなげていくことをすすめていきます。そのためには、各自が失敗を恐れず「多少上手くいなくても大丈夫！」という気持ちで実践し、市町村を越えて交流して、改善を図りながら、新たな実践へつなげていくというサイクルを確立させ、富良野ブロックの研修が、自分たちの仕事を高める場として機能することを目指していきます。